

快適な空間と時間を提供するには

岩本 浩樹

九州旅客鉄道株式会社(運輸部 車両課 主席)



いわもと ひろき

はじめに

JR九州はこれまで、800系「つばめ」に代表されるように数多くのユニークかつ斬新な車両を世に送り出してきました。そのいずれの顔ぶれも、他交通機関との厳しい競争の中で、「選ばれる鉄道」を目指した果敢な挑戦の歴史を物語っています。

JR九州が車両づくりにおいて基本としているのが、「感性的価値」の創造です。無意識に「乗ってみたい」と思ってしまう何かを感じていただける、そして実際に乗った後にも、さらに新しい発見をしていただけるような空間と時間を提供することを目指して、車両をデザインしてきました。

車両をデザインする上での第一歩は、明確なコンセプトであることは言うまでもないでしょう。列車の目的地やお客様の乗車時間、その時の背景にある世の中の嗜好などを十分に吟味し、徹底してコンセプトを詰めて練り上げます。そして、決定したコンセプトは、デザイナーや実際に車両を作るメーカーのエンジニアの間で共有するだけでなく、そこには書いていない“思い”を一つにすることがもっ

とも大切なことであり、新しい車両を開発するための基本条件であると思います。

そして、この“思い”が具体的な形となり色となりそして車両そのものになり、さらに、その“思い”がお客様に伝わるかどうかにより、快適なそして素敵な時間を過ごしていただける空間となるかどうかが決まるってくるものだと考えます。

もう一つは“こだわり”です。職人の世界に相通じるものがあるかしれませんが、一旦決めたコンセプトについて徹底的に“こだわり”ながら設計を進め、特に細かな部分(ディテール)ほど慎重かつ大胆に詰めていくことが重要です。どこまでこの“こだわり”を持続させることができるか?そこには、部品の形状をどうするか、部材の構成を



図1 787系 何もかもワンランク上の空間



図2 787系
天井、腰掛、背面テーブルに統一されたライン

どのように組み立てるかという、機能とデザインを融合させる困難な課題が現れてくるわけで、ここにこそ解決のための本当の技術と知恵が必要になってくるわけです。これらの挑戦を重ねていくことにより、一つ一つの車両が個性を持ちながらも、連続性をも兼ね備えることができ、列車を乗り継いだときに新しい雰囲気を感じながらもどこかに安心感があるというそんな車両づくりが可能となりました。

九州の玄関口である博多からは、鹿児島・大分・長崎の3方面に向けて「つばめ(リレーつばめ)」「ソニック」「かもめ」といった九州の代表的な特急列車が発車していきます。これらの列車はそれぞれが登場した時代背景や役割によって独自の顔を持っています。その概要についてデビュー時を振り返りながら紹介したいと思います。

代表的な車両の紹介

1) 静寂性と豪華さを完備した「動くホテル」

787系「つばめ」は、九州の幹線である鹿児島本線の博多～西鹿児島(現 鹿児島中央)を結ぶ列車として平成4年7月に登場しました(図1, 図2)。車両は、約4時間の旅を楽しく優雅に過ごしていただけるように、「旅を楽しむ=時間を楽しむ」をテーマに、「車内を自由に動き回れる」という飛行機にもバスにもない利点を活かし、とにかく道中が楽しく、疲れも退屈も知らない旅の実現を目指しました。静寂性と豪華さを完備した「動くホテル」をイメージし、何もかもワンランク上、グリーン車両に進めば瀟洒なホテルに足を踏み入れた気分、天井の高い洗練された雰囲気のビュッフェはカフェバーの気分、荷物棚はハットラック方式とし、ビスや蝶つがいも視界から消し去ることにより洗練された空間を作り出しました。さらに天井と腰掛、背面テーブルのラインを統一することで、よりスッキリとした空間としました。木、石、ガラスなど素材でも高級感を追求して、普通車でグリーン車の感覚、グリーン車なら一等客室と呼びたい仕上を行いました。これらの取組みは、その後の特急列車の基本となっています。

2) ワンダーランド・エクスプレス

883系「ソニック」は、平成7年4月に登場しました(図3, 図4)。当時、九州は高速道路が相次いで開通、十文字に繋がった縦貫道と横断道を縦横無尽に走行するハイウェイ



図3 883系 「不思議の国」

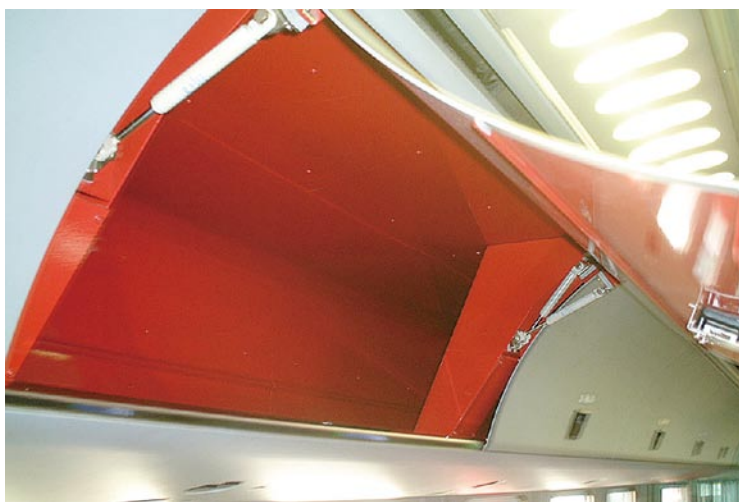


図4 883系 ハットラックを開けば中は真っ赤

バスやマイカーに対抗するための切り札として開発したのがこの振り子式特急電車です。

速く走ることはもちろんのこと、それに加えて「旅は楽しくなくちゃ。」をコンセプトに、驚き、楽しさ、そして発見を追及した車両です。先頭形状は、子供たちに人気のある機械戦士たちをモチーフに、パネルの色を変え、2次車、3次車と「顔」を変えるなど、883系ファミリーという新しいカテゴリーを作り上げました。車内に足を踏み入れた時、乗り物とは思えないディテールに皆さんアッと驚かれたと思います。床から天井までのフルハイトのガラスのドア、かわいい動物がずらっと並んでいるような客室、ハットラックを開けば中は真っ赤、随所にさりげなく配された手すり・・・883系は「不思議の国」、誰もが文句なく楽しめるワンダーランド・エクスプレスとすることができました。



図5 885系 乗ることにより安らぎを得られる空間

3) 「和」文化を取り入れた究極の特急車両

平成12年3月、885系「白いかもめ」がデビューしました(図5、図6)。4年後の九州新幹線第一期開業を控え、「白いかもめ」は在来線特急の集大成となる車両でした。「究極の特急を作ろう」「今までにできなかったことを全てやろう」という思いから、奇をてらうのではなく、21世紀の車両のあり方、鉄道旅行のあり方を示すものにしたと考え、コンセプトを「和」としました。単に、日本式というのではなく、我々が忘れかけている日本文化をもう一度原点に立ち戻って考えようと思いました。日本の文化は、元来、

リサイクル文化であり、鉄道の車両も決して例外ではなく、できるだけ天然素材を取り入れ、床には天然木のフローリングを、シートは総革張りのハイバックシートとし、車体もリサイクル素材であるアルミニウムを採用しました。

デッキには、書を大きく掲出し、ギャラリーとしてそこに憩う人たちを和ませるだけでなく、自分の居間に居るように心地よく過ごしてもらうことができます。また、車内のいたるところに、さりげなく配されたかもめのシンボルマークは、親しみを覚えることができます。乗ることにより安らぎを得られる空間の提供を究極の特急「かもめ」で実現させることができました。

4) 「日本であり、九州の」新幹線

21世紀の九州にふさわしい新幹線とするため、800系「つばめ」は普遍性のある機能美を追求すると同時に、日本であり九州であるという地域のアイデンティティ(特性、風土…)を洗練された形で表現することとしました(図7、図8)。具体的には、先端技術から生まれた素材と工法、それに伝統的な素材と職人の技を組み合わせ、ユニバーサルデザインの充実に努めるとともに、熊本の桜材によるロールブラインド、鹿児島島の楠材による壁、八代のい草を加工した縄暖簾など、日本伝統の古代模様、古代漆色、彫刻など、地元(日本)の天然素材伝統の技を加えることで、さらにエコロジカルな、さらに心やすらぐ車内空間を構成しています。



図6 885系 腰掛に収納されている木のテーブルに配されたシンボルマーク



図7 800系 エコロジカルな、さらに心やすらぐ空間

おもてなしの“こころ”

これまで主にハードの部分について述べてきましたが、それだけではお客さまに満足いただける快適な空間と時間の提供ができたとは言えないでしょう。一流のサービス、おいしい食事、クリーンな車内など、“こころ”のこもったおもてなしが充実して初めて、高度にデザインされた車両と呼ぶことが出来るのです。787系「つばめ」のデビュー以来、客室乗務員によるグリーン車でのサービスはもちろんのこと、客室乗務員自らがコーディネートした沿線の素材を使ったオリジナル弁当や、沿線のおいしい名物を発掘しての販売など、常にお客さまの満足を追及するための活動をよどむことなく続けてきました。ようやく、おもてなしの文化が育ちつつありますが、さらに進化させ続けることが必要だと考えます。

また、グッズやパンフレット、手提げ袋に至るまで統一感を持たせたデザインとすることにより、列車にご乗車される前から、ご乗車された後までを継続した快適な時間として提供させていただいています。

おわりに

ここで紹介した787系「つばめ」、883系「ソニック」、885系「白いかもめ」、九州新幹線800系「つばめ」は、国内外を問わず数々のデザイン賞を受賞することができました。これらは単なる色、形としてのデザインだけではなく、お客さまに快適な空間と時間を楽しんでいただくことが多少



図8 800系 八代はい草を加工した縄暖簾

なりともできたことが評価されたものだと考えています。デザインと技術はそれぞれ単独では成り立ちません。お客さま、世の中は変化し続けます。また敏感です。これに対応していくためには、サービスを提供する事業者とデザイナー、そしてメーカーのエンジニアが切磋琢磨し続けていくことが必要不可欠です。

JR九州の20年間にわたるデザイン戦略の一部をご紹介いたしました。鉄道各社におかれましても各々個性的な取り組みが行われており、今後、魅力ある鉄道が日本中に溢れていくことを期待するとともに、我々もその歩みを決してとどめることなく邁進していきたいと考えます。RRR